OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	三木家絵画に見る江戸時代の文人世界 ： 三木家所蔵画幅画賛釈文
Author(s)	高嶋, 藍; 湯城, 吉信
Citation	懐徳堂センター報. 2008, 2008, p. 51-57
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24382
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂センター報２００８　（大阪大学大学院文学研究科・文学部　懐徳堂センター　二〇〇八年二月二九日発行）

三木家絵画に見る江戸時代の文人世界 ― 三木家所蔵画幅画賛釈文

高嶋藍　湯城吉信

播州の大庄屋三木家は、当主が懐徳堂に学んだこともあり、懐徳堂に関わる資料を多く蔵している。それらの資料が現在、大阪大学懐徳堂センターに寄託されている。その経緯については、懐徳堂センター（井上了記）「大庄屋三木家所蔵懐徳堂関連資料の寄託受け入れについて」（『懐徳堂センター報二〇〇五』）を参照されたい。以上の資料の中、絵画については、奥平俊六「大庄屋三木家の絵画」（『懐徳堂センター報二〇〇七』）に美術史の視点からの報告がある。それに対し、本稿では、その画賛に焦点を当て、できる限りの解読を試みた。ただし、残念ながら未解読の箇所が残った。特に、「君子一笑図」は解読できない部分が多い。博雅の士のご教示を待ちたい。

作者未詳「神農・陶弘景・董奉図」　林鵞峰（向陽子）賛

林鵞峰は、江戸時代初期の儒学者。林羅山の三男。

陶弘景

貞白名高術亦鴻、活人心匠施神功。
任他南北戦争日、風静山中十八公。

【注】〇陶弘景…中国の南北朝時代の人。道教の大成者として有名だが、『神農本草経集注』の著もある。　〇十八公…松のこと。

【現代語訳】心清く名高く医術にも優れ、人を救うことに心を巡らし、神業を施す。さもあらばあれ、南も北も戦争に明け暮れているが、風の静かな山中の松のように〔心静かに日を過ごす〕。

神農

得位得名又大徳、百草薬毒嘗能識。
継天立極功業餘、醫國済民躋壽域。

【注】〇神農…中国古代の伝説上の帝王の一人。農業の祖とされ、百草をなめて、民が毒に当たらないように教えたと言う。日本に伝わり、薬の神として大阪の道修町でも祀られている。　〇醫國…普通はこれで国を治めることを言うが、ここでは医療に特化していると思われる。
〇躋壽域…田能村竹田画「神農図」（『大分県先哲叢書　田能村竹田

資料集　絵画篇』（大分県教育委員会、一九九二年）五九五頁）への画賛（角田簡筆）に「人免夭折皆躋壽域」の句がある。

【現代語訳】地位あり名誉あり徳にも優れ、あらゆる草の効用を舐めて識る。天に則り優れた政治を行う合間に、国を救い民を救い長寿を実現した。

董奉

百歳董仙猶壯顔、通醫察病死生関。
枝頭春意何為閙、紅杏園中日月閑。

【注】○董奉…三国時代の人。医術にたけ、治療代の代わりに杏の苗を植えてもらっていると、やがて庭がうっそうとした杏の林になったという。後世、良医を杏林というのはこれに基づく。

【現代語訳】董奉は百歳になっても顔色衰えず、医に通じ病を察し死生に関わる。枝先に春の息吹がかまびすしいが、紅色の杏の花の咲くこの庭では時がゆったりと流れる。

中林竹洞筆「春秋山水図」

中林竹洞については、『日本書画骨董大辞典（書画篇）』九五五頁～が詳しい。同書には、竹洞は山水には多く渇染法（筆のかすれ具合で濃淡を付ける技法）を用いるとある。中之島図書館には、『竹洞画稿』と『竹洞鳥虫画譜』とが所蔵されている。『竹洞画稿』山本梅逸序には、「余友伯明中林氏、嘗従（油谷）天遊先生問画法、好作山水図、気韻高古、筆墨蒼老、甚有古人遺意、泥鉄之功。彬々然遂成矣」とある。

萬山艸堂圖

李伯時嘗作龍眠山莊圖、欲以繼王摩詰輞川之作。余亦欲作萬山草堂圖以學二公之意。然龍眠輞川固在天地間、如吾萬山草堂唯存於吾胷臆間耳。雖然、吾胷臆豈非天地也哉。余性好山居、有絶俗離世之心、而莫之能遂。晩歳忽悟解曰、山林者在吾心而已矣。豈別有山林乎。苟山林吾心、則所見無非山林者。大而城樓屋宇、小而家具器物、感吾山林也。逍遙其間、与物相忘、則奚必求如夫輞川龍眠者為也。非敢擬二公勝事、聊以自遣云。

弘化二年之夏　隠士沖澹

【注】○李伯時…李公麟。宋の人。詩に長じ、画をよくした。○龍眠山莊圖…蘇轍『欒城集』巻一六の「題李公麟山莊図」に、李公麟が龍眠山莊圖を作った話が見える（「子瞻（＊蘇軾の号）既為之記、又属轍賦小詩、凡二十章、以継摩詰輞川之作云」＊蘇軾のことは『東坡集』巻九三「書李伯時山莊図後」を言うか）。同文章は、『宋詩紀事』巻二一にも抜かれている。その他、『東都事略』巻一一六にも龍眠山莊圖に触れる文章がある。○王摩詰…王維。唐代の自然詩人。○輞川…王維の別荘の名。王維はここでの清雅な楽しみを、「竹里館」他の名詩に残した。○天地と胸臆と…孟郊詩「贈鄭夫子魴」（『孟東

野詩集』巻六、『唐詩品彙』巻二十）冒頭に「天地入胸臆」の句がある。　○「与物相忘」は『荘子』に見える忘我の境地を言うのであろう。　○弘化二年…一八四五年。○沖澹…中林竹洞。安永五（一七七六）年～嘉永六（一八五三）年。文人画家。名は成昌。字は伯明。通称は大助。号は竹洞・沖澹・東山隠士など。山水図や四君子などの画題を好み、中国画を規範としながら高雅な作風を確立した。

【現代語訳】李公麟はかつて龍眠山荘図を作り、王維の別荘輞川荘での作品の跡を継ごうとした。私も万山草堂図を作って、二先生の意思に習おうとした。だが、龍眠荘や輞川荘は天地の間に実存したが、我が万山草堂は私の心の中に存するだけである。とは言え、私の心がどうして天地でないと言えよう。私は山に住むのを好む性分で、世俗を離れたい心を持っているのに、果たせないでいた。晩年になって、突然悟って思った。「山林は私の心にある。どうして別に山林があろうか」と。もし山林が私の心なら（「吾心を山林とす」？）、見るものすべて山林である。大きいものでは城郭や屋敷から、小さなものでは家具や調度品に至るまで、私を感動させる山林である。その間を逍遙し、物我の存在を忘却できれば、必ずしも輞川荘や龍眠荘のようなものを求める必要はない。あえて二先生の故事に擬すつもりはない。いささか自らの慰み物とするだけである。

外箱蓋表墨書
中林竹洞筆春秋山水畫幅
外箱蓋裏墨書（箱書）
先生淡彩揮毫正筆無疑者也／大正七年□□　□□□城鑒

田能村竹田筆「草虫図」　篠崎小竹賛

竹田は本図以外にいくつかの草虫図を残している（『大分県先哲叢書　田能村竹田資料集　絵画篇』（大分県教育委員会、一九九二年）三八一頁、四五一頁）。

竹田自賛
夢研兄近日學詩餘、格調清脆可喜。其闔晩云、賤已醒（酲？）、意初濃、黄昏猶未下簾櫳、非雨非風聲、清徹不奈、唱蛩悩殺儂　竹田生并録

【注】○詩余…形式は、例えば、白居易「憶江南」では、句の字数が三五七七五、押韻が二四五句目と決められている。この詩余については未詳。　○竹田と亀山夢研との交流については、息子の田能村如仙著「竹田居士伝」（一八七八）や竹田著「屠赤瑣々録」巻四に言及されている（それぞれ『大分県先哲叢書　田能村竹田資料集　絵画篇』（大分県教育委員会、一九九二年）四七七頁、一四六頁に見える）。また、竹田筆「春秋山水図屏風」に「丙戌中秋前三日書於尾路之寓処」「余四年前在京為夢研兄作屏風」の文句が見える（同上書二〇一頁）。竹谷長二郎『文人画家田能村竹田―「自画題語」訳解を中心に』（明治書院、一九八一）三二六頁によると夢研は竹田のパトロンであった。

【現代語訳】夢研様は最近、詩余（詞）を勉強され、格調は清らかですばらしい。その「閨晩」という作品に言う。「私（女性）はすでに目覚めて、意識もようやくはっきりしました。日暮れだというのにカーテンも下ろしていませんでした。雨でもなく、風の音でもありませんが、その澄み切った音色は如何ともしがたく、虫の音が私を悩ませます。」

白文方印「人生行樂耳」

＊『漢書』巻六六「楊惲伝」に「田彼南山、蕪穢不治、種一頃豆、落而為萁、人生行樂耳、須富貴何時（かの南山に狩し、蕪穢すれども治めず。一頃の豆を種え、落ちて豆がらとなる。人生行楽せんのみ。富貴を須つも何の時ぞ）」という楊惲の詩が見える。地位を失い、田舎に遁世した楊惲が農民と歌った歌とされる。

小竹賛

我邦唱詩餘者竹田生為祖而無復継者矣。夢研不知為何人、此詞頗有風致。豈學於生、而有得焉乎。生作畫而書詞其上、蓋寓欣抃之意、而鼓舞之也。七十小竹老人書

【注】○欣抃…喜ぶこと。

【現代語訳】我が国で詩余を作ったのは竹田先生が始めであるが、後継者がいなかった。夢研がどなたかは知らないが、この詞はすこぶる趣がある。師に習って自分のものにできた人と言えよう。先生が画を描いてその上に詞をお書きになったのは、喜びの気持ちを込め、お励ましになられようとしたのであろう。

印「三樂」

＊三楽は、家族が安泰なこと、天にも人にも恥じる点がないこと、天下の英才を教育することの三つの楽しみ。『孟子』尽心上篇に見える。

外箱蓋表墨書

竹田先生艸蟲之圖賛　小竹先生題辞

外箱蓋裏墨書（箱書）

竹田先生艸蟲畫幅、尾路夢研堂亀山氏之舊藏也。三十年前、予曾觀之於其家。今主人元輔已逝矣、藏亦従而散逸、此幅歸他家之手。因再觀之、既有重逢舊知之喜、而又不能無烟雲過眼之感。覧了遂誌得。昭和三戊辰萩葡花月　七十三叟　竹霞山人憙

己酉孟秋月拝観畢題簽　錦江釣叟口長

【現代語訳】竹田先生の草虫図は、尾道の夢研堂亀山氏の旧蔵であった。三十年前、私はこれをその家で見た。今、主人の元輔が亡くなって、所蔵品も散逸し、この画は他人の手に帰した。再びこれを見ると、旧知に再会したような喜びがあるのと同時に、世の中の移り変わりに感慨を催さずにはおれない。見終わってここに記録する。

田能村竹田「疎林平遠図」

『松本松蔵氏所蔵　竹田先生画譜』（恩賜京都博物館、一九二九）乾には、本図と構成の似る「寒林山水図」（三〇）、「疎林渓閣図」（三四）、「倪法山水図」（三一）の三作品が収められている。竹田の好んだ画題だったのであろう。

小竹関係の資料は中之島図書館に多数保存されている。例えば、篠崎槩「小竹先生行状」（甲和664）、「清書画名人小伝」（嘉永元年）など。大阪大学図書館の逆瀬文庫にも「篠崎小竹　頼山陽宛書」（1幅）（逆17／掛軸145）、「篠崎小竹詩稿」（1幅）（逆24／掛軸152）が見える。

自賛

弾棊須要詩情。情者古人作歌之意、喜怒哀樂之所見端也。有是情斯有是聲、聲情倶肖乃為有曲。然必讀書論世爾雅温文、始能與古人之情相洽。故弾高山則得其逸致、鼓秋水則得其幽思、會而通之無曲弾(注)不尓。若夫塵翳榮心随手入弄、氣味与古遠矣。

竹田外史憲画併録

（注）「ヲ」が付いている。間違いを指摘する（正しくは「不弾」）のであろう。

【注】○秋水…しばしば心の清らかさを喩えるのに用いる。

【現代語訳】琴を弾じるには詩情を必要とする。情は古人が歌を作った意味の所在であり、喜怒哀楽が表れる端緒である。この情があってこの音が出、音と情とが一致して曲ができあがる。ただし、必ず読書し世の中のことを考え、優雅な立ち居振る舞いを身につけることができて始めて、古人の情に適うことができる。そうして高山を弾じればその高い境地を得ることができ、秋水を鼓すればその幽遠な境地を得ることができ、それらを一体化することであらゆる曲を弾じることができるようになる。あの世俗の塵の曇りが心にまとわりつき齷齪している連中は趣きが古とは遠くかけ離れている。

【解説】竹田は、形（表面的技術）よりもその中味（情）の重要さを強調したようだ。例えば「俗間専尚三絃。急絃繁手、悉喜其音、而不顧詞意如何。蓋唐詩已然。白楽天詩云、古人唱歌兼唱情。今人唱歌只唱声。近日画家多崇形似、而不知風韻何物。蓋宋人亦同。欧文忠詩云、古画画意不画形。梅詩詠物無隠情」（『竹田画論―山中人饒舌訳解』笠間書院、二〇五頁）と言う。

白文方印「當以樂死」

＊『大分県先哲叢書　田能村竹田資料集　絵画篇』（大分県教育委員会、一九九二年）「印譜」五頁では誤って「富民楽死」と読む。なお、この印は、『大分県先哲叢書　田能村竹田資料集　絵画篇』（大分県教育委員会、一九九二年）所録の一八五九年田能村如仙等撰「竹田印譜」や松本松蔵氏所蔵　竹田先生画譜』（恩賜京都博物館、一九二九）の印譜には見えない。「当以楽死」は、悠々自適の生活を送り、死をも恐れないことを言う。史書では、例えば、『晋書』巻八〇「王羲之伝」に王羲之の言葉として見える。

小竹賛

數日前見清人畫山水全幅用石分三面之皴法。今觀此幅亦然。外史於詩畫必有所據。是其所以為文人珍重乎。　友人小竹散人弼書

【注】○石分三面之皴法…岩石を三つに分けて描く画法のことらしい。唐代の荊浩作「山水節要」に「石分三面、路分両岐」の語が見える（明代・唐志契撰『絵事微言』巻上所収）。その他、同じく荊浩作「画山水賦」には「石分三面、路看両蹊」とある（『淵鑑類函』巻三二八所収）。　○必有所據…竹田が古を尊んだことは、『竹田画論―山中人饒舌訳解』（笠間書院）に見える。原文「世大抵不知古画妙処、故捨之不学也」（同上書二一二頁）、「時史邈悦今俗、不欲専学古人意…」（同上書二一七頁）、「時人学書、不論工拙、有所根抵。…画史則否。…従人請求、突然命筆、無所考拠。尽取諸臆、不知古人規矩在何処也。」（同上書二一八頁）。中林竹洞を評する語の中にも「悉有根抵」の語が見える（同上書一〇三頁）。

【現代語訳】数日前に清人の描いた山水図で「石分三面の皴法」を用いているのを見た。今、この画を見るとまた同様である。外史（竹田）は詩画において必ず基づくところがあった。だから文人に珍重されたのであろう。

内箱蓋表墨書

竹田翁疎林平遠圖　小竹翁賛辞

内箱蓋表墨書（箱書）

戊申清和月再觀遂簽題　錦江釣叟道長（辰？）

岡田米山人「君子一笑図」

米山人や息子の半江は、田能村竹田の「師友画録」巻下に登場する（『大分県先哲叢書　田能村竹田資料集　著述篇』（大分県教育委員会、一九九二年）四四五、四四六頁）。三木家に所蔵されている掛け軸の作者は互いに交流があったことがわかる。

中之島図書館には、「岡田半江尺牘」（後藤漆谷宛）（甲和997）、「半江画山水華卉冊」（甲和1283）が所蔵されている。

君子一笑之圖

秦先生求畫、急務把筆無適意者。一日、自外帰、児粛作畫。視之、先生所致之紙也。叱之且啓簾（？）、已而以為余畫、粛畫尾碌（礫？）耳、近粛也引領于先生久之。今以其畫老（光？）名利（刹？）則先生開一咲乎、将失望乎。是可一笑焉（曷？）。以此笑開先生之咲、則余所望也。因作君子一笑之圖、係小詩以呈。詩云、

竹乎何似荻
犬乎何似羊
君観開一笑
老拙書畫揚
老来只漫狂　　七十二翁米山人

【現代語訳】秦先生が画をお求めになった。急いで筆を執ってみたも

ののアイデアが浮かばない。ある日、外から帰ると、息子の粛が画を描いていた。見ると、先生が下さった紙である。叱って、…やがて自分の画とした。粛は瑣末な部分を描いただけである（わずかに礫のみ？）。最近、粛は先生に教えを請うて、しばらく経った。今、この画をもって…（名利の光（ほまれ）？）とすれば、先生はお笑いなさるだろうか、失望なさるだろうか。失笑を買うことができるだろう？この笑い（一笑図？）で先生の笑いを誘うことができれば本望である。そこで君子一笑図を作って、小詩をつけて進呈した。詩にいう。

竹はなんと荻に似ていることか
犬はなんと羊に似ていることか
先生がご覧になって笑いを開くことができれば
老いぼれの画が報われるというもの（？）

【解説】竹の下に犬を描き、「笑」の字に見立てた「一笑図」は確立した画題であったが、この図は、息子粛が絡む画の経緯を背景に、秦先生（君子）の失笑を買えれば本望だという謙遜の意を込め、「君子一笑図」と名付けられているのであろう。「君子一笑」は「故書之為将来君子一笑（そこで記録して後世の君子の笑い草とする）」というような文句で、エピソードを綴った後に言われる決まり文句である。

印「烟雲供養」

＊「烟雲供養」は画の風景を養生の足しにすること。黄公望等の画家が年を取っても要望が衰えなかったのは、画の風景で養生ができたからであろうと言われたことに因む。『画史会要』巻三に「『太平清話』云、大癡九十而貌如童顔。米友仁八十余神明不衰、無疾而逝。蓋画中煙雲供養也」とある。

【注】○『太平清話』…明陳継儒著の雑記。○『画史会要』…明朱謀垔著。○大癡…黄公望の号。○米友仁…宋の米芾の子、字は元暉。世に小米と号す。

（高嶋…大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（日本文学））
（湯城…大阪府立工業高等専門学校准教授）